鬼さんこちら、怪ある方へ

ルイ＝ボンジョヌール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼さんこちら、怪ある方へ

【Ｎコード】
Ｎ４２５４Ｆ

【作者名】
ルイ＝ボンジョヌール

【あらすじ】
豪傑剣豪笑鬼！冷血剣士立香！まぬけ法師！な３人がどたばた暴れる話です。妖怪ファンタジー！！バレバレな男装女装伏線があったりなかったり。

第一話

「…女…？」

今目の前に倒れている男…いやおそらくは女を見やってそう呟く。

「……」

致命傷を負って尚、倒れた剣士は先ほど自分切りつけた者を双眸でにらみ続ける。

ヒューヒューと苦しそうな呼吸音だけが夜の闇に溶けていく。

「…面白い…」

さして面白くもなさそうにそう呟くと、さして怪我を負ってもいない長身剣士の方は倒れた剣士に近づく。

「（ヒューヒュー）……グッ……」

どうにか奴がゆらゆらと近づいてきたところまでは覚えているが、ひどく視界が歪むやらでそこで意識が完全に途切れた。

――

「おうよ！！！俺っちの腕は天下一品！！なぁ？相棒！？」

「…まぁそのバカさ加減を補って余りあるほどには、バカ力かもしれませんわね。」

「てめーバカって二回言ったろ？？言ったよな？結局バカてことか？あぁ？？」

「バカですわ。少なくとも、こんな無茶をしようと考えている時点

で。」

「ははははは！！！違ぇねー！！！！！ま、ついてくるお前も大バカだっつーな！！！！」

豪快に笑うその剣士、名を笑鬼（ショウキ）という。

親に貰った名は捨てた。名の通り笑いながら鬼のようにモノを切る、だそうだ。自称。

身の丈５尺ほど。ま、１６０くらい？（天の声）全体に細身であり、こんな性格の割にわりと整った顔立ちをしている。

癖の強いぐっしゃぐしゃの髪を豪快に束ねあげ一つに結っている。

そんな風貌ではあるが、黙っていれば「美しい」という言葉が当てはまる、かもしれない。

「…ま、それもそうですわね。」

返す「相棒」、名を立香（リッカ）という。

こちらはやたらと背が高い。６尺は届かないといったところ。１７５。

ひどく整った顔立ちだがその切れ長の眼で睨めば人が殺せるとかないとか。

黒い女物の着物の裾もとに上品にも赤ボタンがあしらってある。腰にさしたやたら長い脇差２振りがなんとも物騒だ。

髪はまとめて結い上げており、知的な眼鏡から除く憂い気な瞳は何とも絵になる、といったところ。

「…さいですか」

さらに二人のやり取りをまぬけな顔で聞いている法師。名は宋蓮（ソウレン）。

笑鬼よりは少し背が高いが、猫背な所為か気圧されている所為か小柄に見える。

法師姿のくせに腰のホルダーに小型の拳銃を二丁保持しているとはいかがなものか。

せめて懐に隠せっちゅー。

今の状況そうも言ってられないのだが。

「で、これからどーすんだい！！！」

「考えなし、ですわね。相変わらず」

相棒は若干あきれ顔だが抑揚なく嘆く。

化け物屋敷の中央部で、妖怪の残骸アーンド血だまりに囲まれ３人の影は座談。

「そーですねー…とにかく頭ぶっつぶせば事は収まると思うのです

が…子分おいて逃げちゃいましたからね～」

呑気な法師。もとい、破壊僧。

「最悪だな！！！そいつ！！！はははは！！」

「笑っている場合ですか。あなたの所為でございますわ。」

「意外と根性ねーのな！！本物の鬼のくせに！！」

「これだけ暴れれば逃げますわ。普通。」

「普通！！普通だってさ！！聞いた！？あんな毛むくじゃらの怪物に向かって《普通》！！！！」

「…元気ですね、笑鬼さん。」

やりとりを聞きつつ法師はあきれ顔である。

「はっきりいってしまってよろしいですのよ？五月蝿い、と。」

「さすがにそこまで勇気がありませんので～」

「…赤き鬼さん、法師殿も困っていますしそろそろ追いかけませんこと？」

「おうよ！！さっすが頭いい奴は言うことが違うねー！！！その調子で指示出してくれや！！

すりゃ俺は暴れるだけでいい！！」

「人の指示も聞かず『正面突破あるのみじゃああ！！！』っつって門ぶち破っていったの、どなたですかしら？」

「そのおかげで、面倒なことになってしまいましたね～」

「あんだあんだ！！俺っちが悪いのかい！！！！おっかけりゃいいんだろ！！わーったよ！！とうっ！！！！」

「いっちゃいましたね…」

「いかれましたわね」

「…追いかけますか」

「追いかけますわ」

ゆるゆると立ち上がると二つの影は月夜の闇に姿を消した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

おはこんにちばんわ！

作者です！バカです！！！

初投稿となりますが、稚拙でしょーもない小説でございまして！すみません！！！

そんなに長期連載にするつもりはございません。

妖怪と変態達の世界、よかったらどうぞみなさまお付き合いくださいませ。

第二話

そもそもの事の始まりは、町で二人が変な虚無僧に絡んだのが原因だった。

結局はこれもある女の陰謀だったわけだが。

「おい！！！あれ見ろよ！！虚無僧だぞ！！」

面白そうな奴にはとにかくがっつり食いつく笑鬼。

「…だからなんですの？」

抑揚なく答える立香。

「なんか変じゃねーか？あいつ？」

「…ふら付いてますわね、若干」

「シシシw声かけてみようぜ！！」

「…ご勝手に。」

いつものことなので放っておこうという方針のようだ。

「おうおうおう！！！そこのピーピー笛鳴らして歩いてる奴！！！」

「…（ピッ）！？」

面をかぶり笛を吹きつつふらふら歩く不審者は反応を示す。

「ピッ？じゃねーよ！！！笛はずせや！！！コラ！！」

「…（ピーピピピッピピピッピーーーー）！」

不審者は笛で答えているようだ。

「ばかにしてんのか？おい！！！おもしれーぞこいつ！！！ハハハハハ！！！」

怒っているのか笑っているのかよく解らない表情を表わす笑鬼。

「…（ッピ～ヒョロロロ～ッピッピッピオ）！！！！！」

「ピ？ピピピッピ？？ピヨ～」

「てめーも口笛で対抗してんじゃねー！！！つか上手いな！！！」

近づいてきたと思いきや、若干こ憎たらしい顔で口笛を吹く立香。

「…！！（ピオ！！ピピッピピー！！ヒョロピー！！）！」

過剰反応する虚無僧。相変わらず足元がおぼつかない。

「ピーピピーピ、ピーピピ！！」

「何？何これ？？？会話？わかんねーよ！！！二人の世界かよ！！！俺も混・ぜ・ろーー」

笑鬼の突っ込み空しく、二人の会話は結構弾んだという。

「あ～あ。なんか打ち解けちゃったよ。がっしり握手してまー…」

「そうですか、旅の方なんですか。確かにお二方ともお強そうだ。」

突如面を外し、涼しげな笑顔でご挨拶始める法師殿。笑鬼がビビっている。

「喋れんのかい！！！つか、なんだ！！ホントに会話できてたよ！こいつら！！」

ずいと、笑鬼に向き直り、いざ先ほどの通訳を始めようとする立香。

「彼は名前をジョンジョリーヌと申しまして、駆け落ちの途中、紫色の大型犬に足をなめられ

気づいたら記憶が無くなっていたそうですわ」

こちらも涼しい顔でとんでもないことを言い始める。

「違いますね。一っつたりともヒット無しですね。」

と、法師は爽やかに顔を引きつらせている。

「…一方的に会話成立してたんかっ！？」

もー半分どうでもよくなっている笑鬼さん。

「そのようですわ。それでわ、ごきげんよう法師さん」

さようなら、という風に優雅に手を振り、あとずさる立香一行。

「ちょっ…ちょっと待ってください！！！日本語で説明しますから！！聞いて！！俺の話を聞けーーーー！！！！！（ゼイゼイ）」

「一人称変ってますのよ。」

「俺、面倒な奴に声かけちゃった？」

「…ですわね。」

涼しい目で笑鬼を見下ろす立香。

「あんでいあんでい！！見下した眼で見下ろすなってんだい！！！

兄ちゃん！言いたいこととやら、とっとと話せやコラ！！！っておい！！」

法師は見事にぶっ倒れている。顔面から。

「おおおお俺か？俺が悪いのか？？」

「うろたえてはなりませんわ、みっともない。こういう時は、ですわね、」

笑鬼に法師を背負わせる立香。

「人気のない所でこっそり埋葬して差し上げ…」

「生きてますからね」

そう青い顔でうなだれながら背負われた者は声を絞りだす。

「た…食べ物を…」

…は？何いってんの？という間が流れる。

「…こいつバカなの？俺よりバカなの？？なぁ！？」

「知りませんわ。バカなんじゃありませんの？空腹と貧血でお倒れのようですし。」

そんなこんなで適当な茶店に腰を落ち着ける3人なのであった。

第二話（後書き）

もう少し「コトの始まり」の話は続きます。

第三話

続き～茶屋にて

「笛の吹きすぎで貧血とは…侮れませんね！笛！！！」

「侮れないのはおまえの頭だから！！何入ってんだ！！スポンジか？鈴か？？」

「失礼ですね～これでも法師ですよ。ありがたーいお経やら説法やら、欲のない綺麗な心がけでが詰まってます」

「食欲に倒れた方が何をおっしゃいますの？」

「ねーちゃんいいケツしてんなー！！」

会話を無視し店員に絡み始める笑鬼。

「うふふ。熱ーいお茶はいかがですか？」

「ぬわっ！！！頭から飲めってか！！脳天から湯気立つわ！！！」

店員の攻撃。

「何をやっているのですかしら？笑鬼さん」

「ちょ…近い近い！！！わーったわーったよ！！お前のケツでがま…ぐぇっ！！」

お盆で殴られて流血事件。賑やかな一行である。

「ごほんっ！話を元に戻しましてですね、実を言いますと私、困っております。」

話が進まないので法師が痺れを切らし、そう切り出した。

「飯食う金がなくてか？」

「…額の血を拭いてください。」

しゅるりと立香が懐から布を取り出すと丁寧に顔を拭ってやる。

「はぁ〜お仲がよろしいのですね」

「おうよ！！な、相棒！！！」

「まぁ、同じ布団で眠るくらいには。」

「…さいですか」

「冗談だよ冗談！！！そーゆんじゃねーから！！！ベストフレンドってやつよ！なははは！！！」

「まぁどうでもいいんですがね。本題に入ります。あなた方の腕を見込んでぜひともお力添えを承りたく」

本当にどうでもいいというように、適当に流し無理やり本題に話を戻す。

「ただでか！？御奉仕しろってか？？いやーーーだね！」

「報酬は何らかの形でこちらで用意させていただきます。現金、となると難しいところなのですが」

「ふーん、……じゃあさ……」

笑鬼の眼から笑みが消える。いつもの人懐こさからは想像もできないような貌で、さながら獲物を前に歓喜した鬼のような貌でささやく

「懐のもん、頂戴？破壊僧さんよ」

立香は表情一つ変えず退屈そうにどこか違う方を見ている。

「…お気づきでしたか」

やや躊躇しながらもガタリと懐から出したものは、二丁のゴツい拳銃

「おお！！！あっさり認めんのか！！お前面白れーな！！！」

「もとより隠すつもりもありませんで。協力してほしい、と言いましたでしょう」

法師の顔に陰が落ちる。

「これを差し上げるわけにはまいりません。というより、あなた方には扱えないはずです」

「ふぅん…確かに弾いれるところがねぇなあ…普通の武器じゃねーっつーことか」

ひょいと手にとってカチャカチャといじると立香の方に投げる。立香は片手でクルクルと銃をもてあそぶ。

「そういうことでして。詳しいことは話せませんが、妖怪の巣を叩くのにどうしても人手が必要なんです」

「…妖怪、ねぇ…」

顔面の左側だけを器用にゆがめると、まるで人のものではない犬歯がのぞいた。

その表情に法師はゾクリとしたものを隠せなかった。

「いーね！！！のった！！！いいだろ？相棒！！！」

「止めても無駄でしょう。最近血に飢えていますし」

「ハハハハハ！！！そーゆこった！！！場所は？どこだ？？早く言え！！！」

法師は驚きの表情で固まる

「よ…よろしいのですか？この条件はあなた方にとって不確定要素が多すぎるのでは！？」

まともな神経の持ち主ではない、そう感じてはいたがまさかここまでとは…これもまさか、冗談なのか？

「あん？？難しいことはわかんねーよ！！！頭脳労働はこいつの仕事だ！！！俺は暴れるのみっつーこと！！！」

「…確かに不確定要素は多いですわ。

でも、不利な条件より、そのリスクより、この人は貴方とこのミッションを面白いと感じた。

それだけでもう充分なんですの。Ｙｏｕ　ｓｅｅ？」

わりと言い発音でヨコモジを扱う立香

「ユーシー？じゃありませんよ！！面白い、じゃいくつ命があっても…」

「あんだようっせーな！！！手伝って欲しいのか！！そーじゃねーのか！！！どっちだ！！！！！」

「…お願い…します」

複雑な表情で、でも確かに真摯な態度で法師は頭を下げる。

どこかこの人たちなら大丈夫だ、と確信した自分がいる。

「おうよ！！！任せろってんだい！！ダチ公！！」

「？」

「今日からお前も友達ってやつだ！！友達のピンチにはかけつけないとなあ？相棒！！！！」

「仰せのとおりに、ですわ」

「…」

なぜか微笑んでいる自分がいた。なぜか暖かな気分にさせられた自分がいた。

あぁ…こんな感情はなんて久方ぶりなのだろう…法師は心で呟くと目を閉じた。

第四話

というわけで、現在に戻ってくるわけだが、明日まで待とうという法師の忠告を無視し、

場所を聞いたとたんすっ飛んで行った笑鬼に付き合わされ

こんな夜中にその名の通り鬼ごっこである。

「いねーな！！びびってんのか！？？大将さんよ！！！！ハハハハハ」

返り血をどばどば浴びてテンションがぶっ飛んでいる。奇声を発しながら身の丈ある大剣をあちらこちらと振り回す。

「危ない人ですね」

「いつものことですわ」

いつものことなのだそーです。

「しかたない、探しますか。善良な市民に被害が及ぶ前に」

「探せますの？」

「術を使います、下がってください」

お札やら魔方陣やら大がかりなセッティングをテキパキとこなしその中央で法師は目を閉じた。

「っふーーーん！！！」

「…掛声まぬけですのね。私、一本取られましたわ」

立香がさして面白くなさそうに言ってのけた。

「ぎゃはははははは！！！やべー！！こいつ！！まじやべーーー！！！」

立香の分まで笑鬼がフいている。いつの間に来たんだこいつ…

「う、うるさいですよ！それよりあれをごらんなさい！！」

赤面法師が指さした方向には一筋の赤い光。天から差し込んでいるようだ。

「早く行きなさい。効果が切れる前に！！！」

もう二度とやるものか、という決心。そしてまだ笑い転げている笑鬼。見ろっての。

「やべっ！！！まじやべっ！！！ひーひー…腹いてー！！！腹…ハハハハハ！！」

「…先に行きます。」

あきらかに気分を害した、という感じで法師は夜の闇に姿を消す。立香も無言であとを追う。

「まっ…待て…おれの…獲物！！！！おいー！！！！」

腹を押えてよろよろと立ち上がるや否や、とんでもないスピードで追いかけて、いや、追い越して行った笑う鬼なのであった。

第五話

「はっけ～ん！！！」

例によって口の片側だけを吊上げにやりと相手を睨む笑鬼。

本物の鬼はというと…戸惑っていた。なんか急にライトアップされて。

「おうおうおう！！！オンステージってか！！！俺っちも混ぜてくれや！！！」

5メートルはあろう岩の上からひょいっと飛び降りると、ガタガタ震える鬼の前に降り立った。

「あぁんだあ？ピンスポ浴びてあがっちゃってんの？？涙浮かべちゃって！！その図体でヒロインか！！！！」

3メートルはある赤鬼が許しを乞うている。見逃しますか？

「いーぜ。俺心広いからさあああ！！！さっさとどこへでもずらかれや！！！」

2、3歩鬼が後ずさる。とクルリと身を翻すと全力疾走でとんずらしてゆく。追いかける天上のライト。

「おい!!まて!!!!主役は俺だ!!!!!つか面白いな!!この術!!!!」

絶対今度また見せてもらう、と勝手に誓う。そして、光を追う。

「ハッ!冗談!!逃がさねーよ。弱虫。」

俊足で追いつき背中から切りつけようとして、空ぶった。

「あれ、わざとですか?」

「わざとですわ。」

やっと追いついた二人の傍観者。特に何をするでもない。

「鬼さんこちらってか???ぬはははは鬼・対・鬼だな!!!!!」

赤鬼も覚悟を決めたのか全力で相手をする気になったようだ。

地を轟かす雄叫びをあげ。鋭い爪と牙をむき出しにし、目の前の小さな人間に食って掛かる！

「遅ぇ…遅え遅え遅え遅え遅えええええ！！！！」

腕をもぎ、首をはね、それでも尚かかってっくる胴体の真ん中を大剣が貫く。

盛大に血を噴き出しどったりと倒れたと思いきや、その体はすぐさま砂となって消えてしまった。

「…終わりましたね」

「おう！！！終わりだ！！！あっけねーな！！」

「十分楽しんでいましたわ。」

「ばれたか！！！はははは！！」

「これでこの町の怪奇現象は収まります。さて、報酬でしたね。何がよろしいでしょう」

「それよりまずは町に戻って体を洗うべきですわ。この方の」

「血だらけですね」

「血だらけですわ」

「おう！！！俺か！！！！服もダメになっちまった！！！！」

「もどりますわよ、早々に。」

「…そういたしましょうか。」

第五話（後書き）

長いプロローグでした！！！

これから物語が動き出す？のか？？（知るかいったんバトルとはおさらばです。

第六話

町に戻ってきた一行、適当な宿に落ち着く。

「立香さんはどうされましたか？」

「風呂だ。俺が洗い流した返り血、掃除しないとですわ～ってな」

「それもそうですね」

部屋には法師が座っている。戸を開け放ち、廊下でタバコを吹かす笑鬼。ゆるゆると二人の時間が流れる。

「ところで…」

なんでもない、という風に法師が話を切り出す。

「なんで男装されているのですか？」

「…なんとなく。」

これまた、なんでもない、という風に先ほどとは違いこざっぱりした鬼は返す。

「いつから気づいてたんだ？」

「なんとなく最初から。小柄ですし、年の割に声が高い」

「んなの理由になんねーな。いっくらでももっと小さくて声が高い奴はいるだろーが。」

「確かに。そうですね、確信をもったのは太刀筋を見たときですね。大剣だからこそ如実に表れた、とでも言いましょうか」

「ふぅん…」

含み笑いを浮かべる笑鬼。目は依然として笑ってはいない。

「あのしなやかな太刀筋を描けるのは、細やかな動きを得意とする女性のものです。力押しのように見えて力任せでない」

「…嘘だな。」

「…嘘ですけどね」

鬼はクシャリと顔をゆがめた。ド素人のこいつにわかるほど笑鬼の腕は未熟ではない。むしろ稀代の剣豪でも気づくかどうか。自称。

「お前、本当の目的は何だ」

「あなた、馬鹿なようでいて意外とキレ者ですね」

「バカだぜー俺っちは大がつくほどのバカさぁ！！！ハハハ！！駆け引きは苦手なんだ。剣のサビになりたくなかったら、言え。」

「それには役者がそろわないと。しばしお待ちください。それよりもあなたの男装の意味が知りたいですね」

「ん～～？だから、大した意味なんかねーよ。…ずいぶん昔の話になるが…」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

「立夏ちゃ～～ん！あーそーぼ！！」

「いいよーーー！！蹴鞠ね！！サッカーね！！」

「さっかあ？よくわかんないよ！蹴鞠でしょ？」

「うん！ヨコモジにお父さんがハマってんの！！気にしないで！！グッドラック！！！」

「立夏ちゃんちはいつも面白いねー！！ここでやる？」

「そうだね！！じゃあどっちがどれだけ飛距離伸ばせるか競争ね！！」

「よくわかんないけどわかった！！！」

「ちょっ…ちょっと待ってください。」「あんだよ？」「この子供たちは誰なんです？」

「立夏が俺で、も一人は近所のガキ。5歳くらいだったか？」「…さいですか」「続けんぞ」

「え～いっ！この球あんま飛ばないよ～」

蹴った球は比較的近いところをバウンドしていった。中身は砂の塊だったりする。

「次は立夏の番ね！！！よし！！うおりゃっ！！！！！」

「あー…」

遠くの方に消えていったそうです。ばい●いきーん！キラーンみたいな。

「あっれ～？なくなっちゃった…」

「お母さんに言った方がいいよ？立夏ちゃんちの球でしょ？」

「うん！！そうだね！！言ってくる！！」

「と、いうわけなんです、お母さん！！」

「あらあら、大変。それはお父さんにも言わなくってはね？」

「何で～？」

「お父さんが買ってくれた球でしょ？」

「うん！！そっか！」

「なんだ～立夏。どうした？ハッハッハッ」

「ボールがね、蹴ったらね、飛んで行っちゃったの。お空にキラーンって…」

「なに？？認めん！！認めんぞ！！！」

「あらあら、お父さん、また血圧が上がってこめかみから赤いものが噴き出しますよ」

「この私でさえ！！天下の剣豪の私でさえ川の向こうまで蹴り飛ばすのがやっとだったあの球を！！！」

「あらあら、お父さん。天下の、の前に自称、をお忘れですよ」

「それをお前はその年で！！！空の星にしてしまったというのか！！！認めん！！！」

「お、お父さん？？」

「おまえは今日から男だ！！息子だ！！！！女なんて断じて認めんぞ！！！ハハハ！！」

「あらあら、立夏、それじゃあ名前を変えなくてはね。」

「息子よ。よもやもう父を超えたというのか。本望なり！本望なりいい！！！思い残すことはないぞ！ぐはっ」

「立夏、あなたは男の子なんだからそんな着物を着ていてはいけませんよ。これに召し変えなさい。」

ーー

「そんなこんなで再教育が始まったわけなんだが…っておい！！聞いてんのか？！」

「聞いていますよ。私の人生でかつてないくらい呆れているだけで。」

「失礼な奴だな！！！！ま、よーは大した理由じゃねってこったああ！！！ハハハハ！！」

「（聞かなきゃよかった）」

「あんだいその顔！！！てめえで話振っといて！！コラア！！！」

「…立香さんの女装と名前はその話と関係あるのですか？」

「おぉ！！立香のこともバレてんのかい！！抜け目ねーなああ！！！

ふん、あるっちゃあるし無いっちゃ無い！！！！」

「どういう意味です？」

「あいつと初めて会ったのは5年前だ。そん時あいつはまぎれもなく男だった。いや、今も男か、一応。」

「それがなぜ…」

「俺があいつに負けたのさ」

「…え？」

法師は耳を疑った。この誰にも止めることなどできない鬼が、負けた？

第七話

「負けたよ。負けた！！完っっ膚無きまでにな！！！」

そう言ってケタケタと豪快に笑う笑鬼。その笑みにはいってんの曇りもない。

「あなたが負けてどうなったんですか？」

半信半疑だが続きを促す法師。

「そっれがよくわかんねーんだよな！！！俺、死んだーと思ったら目が覚めたら布団の上で。んで、あいつが横に座ってた」

「…」

「んで、お前はもっと強くなるぞ！！そうか！！んじゃ弟子にろ！！ってな！！なぜか突然女装に目覚めたがようわからん！！」

「笑鬼さん流にアレンジしてますね？」

「まー大体そんなところっつーこった。」

「弟子？あなた方の関係は一体何なんです？一見彼女…いえ、彼はあなたに従事しているように見えますが。」

「だからぁ友達だよ、と・も・だ・ち。あいつに剣の手ほどきを受けてたのはもうだいぶ前だ。

今は俺の方が強いんじゃねーの？？なははは。…嘘だがな！！！！」

「嘘なんですか。」

「嘘だよ。俺は、多分、一生、あいつにはかなわない」

「…意外ですね。こんなことは言いたくありませんが・・・妄信なのでは？」

「俺、あいつが今まで本気だしてんの見た事ねえ。俺がどんだけ本気でかかっていっても、だ。」

「ほう…」

「頭も切れる、単純に力比べだってかなわねぇ。俺あいつに勝てる部分なんて一寸もねえな！！！！ハッ」

そう言い切る笑鬼の顔はどこか誇らしげである。

「それでは……そうですね。彼を男性として、見たことはないのですか？」

「あん？あいつは女だろ。もう。」

「もうって…では逆に、女として慕う気持ちはないのですか？」

「女として…ねぇ～～～いや、俺そっちの趣味は無ぇし！！！」

「あぁ。そうなんですか。なんか面倒くさいんですね。

でもこう、年頃の男女がこうも毎日寝食を共にしていればなにかあるでしょう？」

「無ぇよ。なあんにも無え！！！そんなんじゃねんだよ。長年の友

達ってやつだ。互いに男友達みてぇなもんさ！！」

「そうですか。」

笑鬼はそうだとして…立香はどうなのだろう、そんなことをふと思う法師なのである。

「…いや、しかし風が気持ちいいねぇ…」

笑鬼が3本目のタバコを吸い終わったところで立香が帰ってきた。

「全く…手がすっかり血なまぐさいですわ。」

「悪りー悪りー！！！はははー！まぁ座れや！！！！なんかこいつが話したいことがあるんだと！！！」

三人で向かい合う形で腰を下ろす。冷めた目つきで法師を見つめる立香。

「…大変失礼なこととは存じておりますが、少々あなたがたを試させていただきました。

正直に申しあげまして、今回の一件は本題ではございません。」

「でしょうね。あなた一人で十分殺れる相手でしたもの」

あの程度の術を見せただけで自分の腕を見抜くか…この男…

「仰せのとおりでございます。実は私、ある方からあなた方のことは伺っておりました。」

「誰でい！！！俺っち回りくどいのは嫌えなんだ！！！」

「神…といったら信じていただけますか？」

「「…はぁ？」」

綺麗に二つの声がハモった。

第八話

「どうも。私が神です。」

「やめろ！！！そのセリフ！！！なんか危険なにおいがする　！！！」

「ごほん、では改めまして、ごきげんよう。私、天照大神と申します。よしなに。」

「うさんくせえええ！！！嘘だ！！！いきなり現れてなんなんだよ！！！」

突如三人の中央に煙が上がったかと思うと絶世の美女…とまではいかないがそこそこ美しく神々しい女が現れたのだ。

「おい！！！ばか法師！！！おめー騙されてんだよ！！！！！コレ何かちげーーよ！！！」

「コレとはなんですか、コレとは。」

「信じてもらえぬのであれば仕方ありません…私の力をお見せいた

しましょう」

「あんでい！！やるってのか！？ああ？？」

「なんと暴力的な人間か…よろしい。そなた、なにか欲しいものはあるか？」

「ねえ！！帰れ！！！」

「なんと…して欲しいことなどないのか？？私が叶えてしんぜようぞ？」

「…」

一瞬考え込んだ笑鬼だが、刹那の後、にやりと顔を歪めた。

「ちょっと耳かせ」

ひそひそひそ…

「了承した。」

ＰＯＭ！！アメコミの擬音みたいな音と共に煙が上がる。

「何事ですか！？」

「…こ…れは…」

先ほどまでザ・美人秘書だった女、もとい女装野郎の姿が一転、普通のザ・武士道になっていた。

「なあつかしいな〜〜髪も一本まとめで！！！ハハハハハ！！！似合うぜ！」

「……（パタム）」

「倒れましたよ？」

やってることと言い、立香のリアクションといい動揺を隠せない法師。

「倒れたな！！！相変わらず！！！」

「相変わらずって何ですか！！」

法師は苛立たしげに反論を示す。全く、何をやっているのだこの鬼は。

「こいつ自分の男装…っていうのか？まあいいや。が許せないらしいぞ！！！卒倒だ卒倒！蕁麻疹出てるぞホレ！！！」

「わかっててやったんですか！？最悪ですね。」

「ギャグだ！！ギャグ！！！ついでによろしく」

「ほいきた。」

「神様ーキャラ変ってますから！！！一瞬誰かわかんないでしょうってあああああ！！！」

セーラー服（笑鬼）、と、猫耳メイド（法師）。なんでやねん。

「私までーーーー！！！！！」

「メイドだ！！！もう時代ぐっちゃぐちゃだな！！！今更か！はははは！！」

「ははは！じゃないでしょうが！！何やってるんですか！自分まで！！」

「こっからが面白いんだっての！！！まあみてろや！！」

笑鬼、げほっごほっと喉のコンディションを調整。異状なし。

「ねぇ～起きて～～起きてってば～～ねーえ」

とりあえず限界まで後ずさる法師。この鬼、先ほどと同一人物とは思えない。その声どっから出してる！！

「ん・・・？はっ！私は…？？えええええ？」

「あ、やっと起きた！おはよん！！！」

とりあえず開いた口がふさがらない立香さん。状況把握に5秒ほど

かける。

「誰ですの??誰ですの??誰…、あ、確か神様でしたわね」

一人一人指さし確認を始める。さらに状況把握に15秒。

「…あ、ようやく理解しましたわ。（パタム）」

「ぎゃはははは!!だっせ!!また卒倒しやがった!!」

「しますよ!!誰だって!!!わけわかんなすぎでしょうこの状況!!!!胡坐をかくなーーーー!!!!」

「は～もういいや。戻してくれ。神さん。」

「信じてもらえましたか？」

「あんたが冗談の通じる奴ってのはわかった!!!」

「…いいでしょう」

「神様、なんで満足げなんですか??なんかいろいろ間違ってますよ?」

「さて…力を使って疲れました。後は頼みますね。私は天界にもどります。」

「また勝手なことを…」

「おう!!!またな!!!」

「うふふふ…よろしく頼みましたよ〜〜〜…」

自称神様、空の方へフェードアウトしていくのであった。

第九話

相変わらず倒れたままの立香を差し置き、二人の会話〜

「で、何だったんだ？結局？？」

「私にも何が何やら…と、とにかくですね！もっと強いモノがいて、倒してほしい、ということなのですよ」

「ふぅん…ま、いいけどさ…お前…」

また獲物を狩るときの顔付をする笑鬼。

「なんですか？」

また背筋が凍る法師。

「お前…人殺したことあんだろ。」

「何故です？」

「目がな…１０年…いや、まだ7、８年つったところか。一人や二人じゃねえ。ざっくざく人を殺ってた目だ。」

「…隠せないものですね」

そう自虐的に笑む法師。

「隠せねえさ。死ぬまでな。」

淡々と返す鬼。

「昔ね、出家する前のことですが。盗賊だったんですよ。」

「ほう…意外だねぇ。それにしちゃきれいな顔してやがる」

野盗などは職業柄顔に傷を負う者も多い。だが法師の顔は頬に傷一つない。

「体の方は傷だらけですよ。」

胸に手を当て尚も自虐的に独白は続く。

「酒も、金も、女も…それこそ飽きるほどありました。実際飽きていたんでしょうね。

スリルも分の悪い賭けですら飽き飽きでした。命なんていつ無くなってもよかったんです。」

「バカだな。」

「バカでしたねぇ、ほんとに。そんなとき出会ったのが彼女です。」

「彼女ってあの神さんかい」

「そうです。…一目惚れでした」

盛大にずっこけた笑鬼。おいおいおい

「しかもなにやら不思議な力をお持ちでしたので！もう骨抜きにされまして！！」

「それで改心したっつーのかい」

「それはもう。」

「今はどーなんでい。無欲、じゃねーのかい？」

「今は、まあ尊敬というのでしょう。下心はありませんよ。」

「神様に欲情ってのもな。ま、あいつは確かに人間臭えがな！！！」

「一回いいところまで行ったんですがね～逃げられちゃいまして～」

「うっせーよ！これ全年齢対象だから！！！やめい！！！」

「…うるさいですわ」

むくりと立香が起き上がる。

「何やらひどい悪夢を見ていた気がしますわ。気分が悪い。」

「おう！！すっきりさっぱり忘れちまえってこった！！！ハハハハ！！！」

「なぜか腹が立ちますわ。ええ、なぜか。」

「それより！あれだ！！！次はどいつを殺せばいいんだ？？法師さんよ！！」

だんだん二人のやり取りに慣れてきた法師は思う。あぁこの方々、確かに恋愛云々の関係ではないな。

「えぇ。その事なんですがね。改めてお二人に確認を取らなくてはなりません。あなた方は…」

二人に向きなおり、真剣な面持ちで切り出す。

「あなた方は「神」を殺す事ができますか？」

第十話

「あなた方は神を殺すことができますか？」

「できるぜ？」

今度は法師が盛大にずっこける。

「あのねー！猪狩ってこいっつってんじゃないんですよ！！！」

「わーってるよ。神だろ？だから。つか、神様とか信じてねーっつーの」

「今さっき目の当たりにしたでしょう！！あれぞまさしく…！」

「人間だろ」

「人間っぽかったですわ」

「あの～もしもし？」

いい加減突っ込み疲れている法師なのである。
どこの世界に煙と共に現れたり不思議パワーで強制コスプレ大会を始める人間がいるというのだろう。

「いや、神様だってコスプレはさせんだろーが！！！」

「誰と話しているんです？」

「気にしないことですわ。」

「俺っちの剣で切れんのかい？そいつは」

「えぇ…おそらくは。神といってもそう呼ばれているだけですし」

「実際神様じゃあないんですの？」

「態度と力は神クラスなのですがね。やっていることは怪物ですよ。」

「…乗っ取りか」

「ご明答。よくご存じで。」

つまりは、もといた土地神を追い出して、そいつがそこをのっとったっつーことらしいよ！

「軽っ！！！」

「だから誰と…」

「シカトですのよ！法師様！！」

「いいぜ！！！殺る！！！決めた！！」

「ですが・・・あの…報酬の方なんですが…」

「あーいいって。んなもん。久々に面白いもん見してもらったしな！！！」

「なんでお二方こっちを見ますの？」

「あ、いえ、それでは、仲間を募りましょう。」

全く、この人たちと言ったら…自然に柔らかな笑みが広がってしまう法師。

「ああ？んだそれ！！しゃらくせえ！！！いらねえ！！」

「無理ですよ。今回は取り巻きの数も力も半端じゃない。さっきの赤鬼なんてうんこですうんこ。」

「うんこってか！！！！はははははは！！！」

「何回もリピートしないいで下さる？下品ですわ。幼稚ですわ。」

露骨に嫌悪を表す立香。…すみません。

「いいですね？腕の立つ者…7人は欲しいところですがまぁ適当に譲歩します。」

「だとさ！！誰かいるか？？」

「そうですわね…この辺りですと、あの方と」

「あいつか！！！うわ！！最悪だ！！！」

「全くですわ。それと、あの山に」

「ぐわっ！！！俺っちリタイア！！！さいなら！！！！」

「…ですわね。まぁ声くらいかけておきますわ。断られら笑顔で感謝。ですのよ。」

「…やむを得ん！！！明日だ！！！寝るぞ！」

「仰せのとおりに」

「え、ちょっと、私はぶられてます？ねぇ？」

「明日になればわかりますわ。今日はもう寝た方がよろしいですのよ？」

「そうします。」

翌日、法師の一抹の不安、見事的中だったり。

第十一話

翌日、珍しいことに笑鬼のテンションが低い。

「うい～～～最悪の朝だなっ！」

いつも以上にぼさぼさな頭を強引にまとめ、着物をだらしなく着て、だるそうに法師に手を振る。

朝、宿屋を出発しようと法師は2人の支度が終わるのを外で待っているところであった。

「なんでですか？そんなに嫌ですか？」

そんな笑鬼の様子に少なからず嫌悪感を抱きつつ法師は言葉を返す。

「嫌だね！！お前も会ってみりゃわかるさ！！！」

「じゃあ誘わなければいいでしょう？」

「いや、他に強え奴しらねーし。つか、強いやつって総じてこう…自分ワールドっつーか、変態っつーか…」

「あなたが言いますか。」

さらりとちゃちゃをいれる法師。

「おー俺なんてまだまだ全っっっ然まともな方だっつーの！！！あぁ…早くお前に会わせてやりてーわ！！！」

「そう言われると会いたくありません。」

ふいと顔を反らし遠くを見つめる法師。

「じゃあ帰れ！！！いや！！俺が帰る！！」

テンションが上がってきたのかかなりオーバーなアクションを交えつつ笑鬼は叫ぶ。

「いい加減にされてはどうですの？」

突如現れたと思いきやしれっとなじる立香さん。

「子供じゃあるまいし、やれ、あれがやだ、これがやだと…」

「じゃあお前はどうなんだよ！！！」

「厭ですわ。心の底から。」

「だーーーくそっ！！！」

「嫌ですが、仕方ありませんわ。多分言われたからには二人では無理なのでしょう？私。無駄死になんて御免ですの。」

「黙って他人（ヒト）のいうこと聞くお前じゃねえだろ！？」

「私、人を見る目くらい御座いますわ。その法師、嘘は言っておりませんもの」

立香は目だけをつい、と動かし法師のほうを見やる。

「うぐっ…わーったよ！！！わーったつーの！！俺も男だ！！腹ぁくくったぜ！！ちきしょ！！！」

「…話はお済ですか？」

あきれ顔で法師は二人を交互に見た。

この二人、なんだかすぐに話が脱線するなぁ。と、深いため息が自然ともれた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一旦先ほどの町を出て数十里。一行は隣の山を登山中である。

季節は秋、麓は紅葉が綺麗であるが上り始めると景色を楽しむ余裕もなく、

整備されていない急勾配にただ黙々と足をかけていく。

ただ在るに任せている木々は、各々好き勝手な場所を陣取り、人の足場にもなるが、同時に通行の妨げにもなっているのだ。

「どの辺だっけーーーー！？」

一人でづかづかと進んでいた笑鬼は中腹辺りまで来たところで後ろを振り返って叫んだ。

「多分この辺りですわ。」

女物の着物だというのに裾を全く汚さずして、息も切らせずすぐに追いついた立香は辺りを見渡す。

「あいつは？」

「法師様なら…」

立香が遥か下を指差す。

「先ほど休憩されていましたわ」

「…まいっか！！！」

構わず辺りの詮索を続行する二人。そのころの法師…

「足が…棒で…動きませんよもう…っぜーぜー」

ゴールまでの距離を目算しながら体力の違いを身をもって実感していたり。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーー

「笑鬼、ありましたわ。」

二人の前方にはボロボロの木造建築。荒れ寺である。

斜めになって半分土に埋まっている鳥居、苔むし、ひび割れた石畳、屋根瓦はすでに見た目寂しい感じになっており、屋根の穴の開いた箇所には

申し訳程度に木の板が打ち付けてあるが効果はなさそうだ。

「あいっかわらず…人の住処じゃねええ！！！」

「化け物屋敷ですわね」

「ま、確かにある意味化け物か！！…いくぜ？」

「仰せのままに。」

と意気込んでみたものの、笑鬼は一歩踏み出したところで立ち止まった。

「…やっぱ帰らね？？おいーーーー！！！」

そういう笑鬼を無視しずかずかと歩みを進める立香さんなのであった。

そのころの法師

「あ～日が…暮れる……ふふふ……先が見えないのですが……まさか…野宿…ぜーぜー」

まだまだ道は長い。

第十二話

がばっ！！！！

真っ暗。背中に腕の感覚。なんか土臭い。苦しい苦しい苦しい…！！

「はーなーせ！！！！コルルルァ！！！」

顔を動かし笑鬼の拳をひょいとかわし、仕返しとばかりにさらに腕に力を込める。

「痛てーーーー！！やーめーろ！！！おい立香なんとかしろ！！！」

笑鬼はじたばたと暴れるが、満足げに微笑む男の手から逃れることはできないようだ。

立香は感情のない目で見つめている。

「久しいね、チビ！！それに立香も」

最後に大きな手のひらで笑鬼の頭をワシャワシャとかき回した後、

やっと手を話した男はさわやかに言葉を続ける。

「お久しぶりですわ、森の熊さま」

熊と呼ばれた男、その名のとおりかなりの大男である。ガタイがいいというよりは全体的に締まっている。

岩清水のように透き通った瞳、優しげな顔つきであり本人曰く、見た目よりも結構若い。

というより、年齢は笑鬼達とそんなに変わらないそうだ。

毛皮で作った羽織は着古された様子であり、そこから鍛え上げられた傷だらけの腕が覗く。

「チビじゃねえええ!! いきなりなにしやがんでい!!!!!…寄るな!!」

つかつかと笑顔で歩み寄る「熊」。

「ん? まだ、スキンシップが足りないのかと思って。ははは、冗談だよ。そんなに怯えないで。」

「俺を野生動物扱いすんなっつーーーーの！！！！

なぁ～コイツいっぺんシメていいか？？いいよな！！つかシメる！！」

「おやめなさい。また遊ばれますのよ。」

「まぁ立ち話もなんだから、座って座って。笑鬼はこちらへきなさい」

「あんだよ！！いやだね！！！！く…来んな！！来んなっつーの！！」

後ずさりする笑鬼の腕をつかむと、有無を言わせず自分の前に座らせ後ろから腕を回す熊。

「離せよ！！ばか力！！！！」

笑鬼はじたばたと暴れるが、やがてあきらめたのかぐったりとうなだれ、おとなしくなった。

始終感情のない眼で二人を見つめる立香。

「お前も…相変わらずだな」

苦笑を浮かべる熊に対し若干普段より低い声で立香は対応する。

「…そうでもありませんわ。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「…つーわけで、力を貸せ！！いや、やっぱいい！！！帰る！！いい加減離しやがれ！！！」

一応一通りのことを雑把に説明し終え、すぐにでも逃げ出したい笑鬼。

「ふむ、また面倒なのに目をつけられたな…」

「だーから！！いいって！！帰る！！！」

「いやいや、そう言われるとどうもね、力を貸すのは構わない…が」

ふと考え込む様子で押し黙ってしまう熊。

「何ですの？」

「……調べてみるか。いいよ。一旦町に下りよう、

ただ今日はもう遅いから泊まっていったほうがいいね。」

「よかったですわね、笑鬼」

「もう何でもいいから離せーーーー！！！！」

＜ガラッ、ドサッ＞という音に三人の眼は一緒に戸のほうに向けられた。

「・・・」

「おう！！！遅せーーーよ！！」

「・・・」

「死んでますわね」

「こいつが法師か。やあ、はじめまして…って聞こえてないね」

到着と同時に力尽きた法師が転がり込んできたが、反応がないため
そのまま火のそばに横たえ、放置。

「ったく!!しゃーねーな!!!!…俺も寝るぜ!!」

「それがいいですわね。」

ということで、翌日完全に足が棒になった法師を熊がおぶさり、来
るときの半分の時間もかからず一行は町へと舞い戻った。

最終話、語り

・・・それからの話を少しいたしましょう。

特記すべきは特になく、

町をうろついていたもう一人の変態と手を組み

過去に彼と関わることがあったのでしょうね。

笑鬼は大鎌をもった女の子（幼女）をナンパし、

やいのやいので即効乗り込む事が決定し、

みんなでわーーーっと乗り込んでいって

頭は俺がつぶす！！！と意気込んでいた笑鬼だったが

元は人であった鬼となってしまった（偽神）に同情してしまい

スキを見せて大けが負ったり

立香がそれを見て大激怒したり

とどめを刺した立香が呪われてしまったり？

ラジバン…あ、違う違う。

とまあいろいろ練っていたのですが…

…長くなりすぎる！！

なぜ男装、女装だったのかもこの時点ではいまいちはっきりしていませんね。

立香もただ単に笑鬼に合わせていただけのようです。

このあと熊にいいかげん男ごっこはもうやめろ、と笑鬼が本気で怒られて逆ギレする、という

エピソードがあったりなかったり。

大鎌の女の子はずっと笑鬼を男だと思って慕っております。

女だとわかった後もさらに慕います。うらやましい限りですね、はい。なんでもないです。

作者、頭が悪いもので、なんだかぐだぐだと伸びてしまい、大変申し訳ない。

打ち切り的な流れで失礼させていただきたく候。

まだまだ旅は続く…といった感じで！！！！！はい！！！

つまらん小説に付き合っていただき、大変ありがとうございました。

また機会がございましたら、お目にかかることもございましょう。

では、それまで御免！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4254f/

鬼さんこちら、怪ある方へ

2010年12月7日14時52分発行